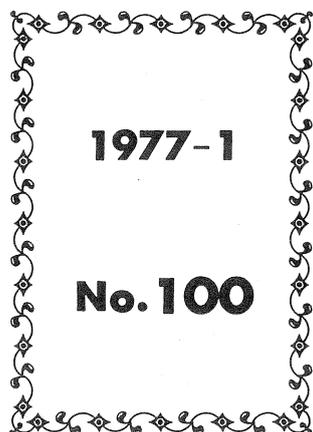


も く じ

文化庁月報100号に当たって

日本の文化に対する欲求と意欲を……今 日出海	4
創刊当時のことなど	安達健二 5
文化的拠点都市を	内村直也 6
私・もの	菅井 汲 8
バイロイト方式	安嶋 彌 9
[韓国の文化事情]	
情報の不足	古野喜政 10
我が町、我が村の文化行政	
独創的な町田の文化都市づくり	小高照男 12
国立劇場ニュース	13
新法人紹介	13
文化庁ニュース	
文化行政長期総合計画について	
「中間まとめ」発表さる	14
第23回文化財防火デー	17
平城宮跡保存の先覚者たち	17
文化交流ニュース	
米国フープス博士から国立歴史民俗	
博物館(仮称)へ資料寄贈	18
チェコ文化大臣クルサーク氏来日	18
前・フランス文化庁長官ミッシェル・ギー氏来日	18
日仏文化交流	19
日独文化交流	19
ブラジル日本文化協会、「ブラジル	
日本移民史料館」の建設へ	19
韓国、木浦の海底から宗元時代の壺を引き揚げる	19
すうじ	
宗教団体・教師・信者数の現況	20
米国映画はどこから一番稼いだか	20
劇場の数	20
同人雑誌の数	20
日本の国や国民について誇りに思うことは何か	21
美術の秋、サンケイ1,000人調査	21
文化財保護法教室(8)	
美術工芸品の管理と活用(2)	22
[紹介]	
イタリアの文化財保護法(Ⅱ)	椎名慎太郎 24
文化庁月報100号の歩み	28



表紙説明 能装束 緑地桐鳳凰文唐
織一領 所有者 佐野雅英氏
身丈146cm 桁73cm 加賀前田家へ
伝来した唐織。桃山時代。

題字デザイン・桑 山 弥 三 郎

パイロイト方式



安 嶋 彌
(文化庁長官)

先進国と発展途上国との違いはいろいろあると思うけれども、その重要なもの一つに、中央と地方の社会的、経済的、文化的水準の較差がある。ヨーロッパや北アメリカを訪れて感ずることは、地方都市の水準の高さであるが、発展途上国となると、首都はなかなか堂々たる構えで、世界最新のホテルが整備されていても、車で二十分も郊外に出ると、貧しい農家が点在しているという風景に出会う。

日本はどうかというと、それはひとまず先進国型に属している。特にここ十年ぐらいの地方の変化には誠に目覚ましいものがある。文化庁の関係でいっても文化会館、美術館、博物館、歴史民俗資料館、史蹟公園などの整備が著しく進んでいる。それも国の一部の補助を除いて、地方の積極的な発意と努力によっている。先日、対談した新劇の岸田今日子さんは、地方に驚くほど立派な文化施設が整備されていることを指摘されていたが、そうした施設の整備に地方の人々が大きな熱意を示されていることは大変有り難いこと

である。先般、文化行政長期計画懇談会が「中間まとめ」を発表し、その重要な施策の一つに地方における文化の振興を挙げているのも、この点において極めて当を得た見識だと思ふ。

ただ、私は地方における文化振興にもっと独自の特色が出せないものかと考えている。本来、文化には普遍性があるし、また昨今のようにマスコミヤ交通が発達すれば、どうしても国全体が一色に塗りつぶされがちであるが、それにしてもこの辺で地方の文化振興における独自性の問題を改めて考えてみる必要があるように思ふ。

今年の春、大阪を訪れて、関西経済連合会の文化問題委員会の方々と談ずる機会を持つことができた。そこでは、かつて西鶴や近松や文楽を育て、緒方洪庵を生んだ大阪の、文化的地盤沈下を慨嘆する声が生々しくであった。多くの国家的文化施設が東京に設けられ、更に重要なことは業績に対する評価の中心が東京に集中していることが指摘された。ただこの傾向には幾つかの例外があり、その最たるものが高校野球

における甲子園の位置である。つまり、高校野球だけは甲子園球場でないといふをなさないのである。そういうものを育てたいというのが、出席者の一致した希望であった。甲子園は高校野球という体育行事のメッカであるが、文化行事、芸術行事についても、このようなものが育たないかというのが私の願望である。しかし、これにやや近い例がないわけではない。また、交通機関の発達がこれを可能にしつつあるようでもある。

例えば、倉敷の大原美術館である。美術館の東京集中の大勢の中にあつて、大原美術館は地方において独自の存在を誇示している。愛好者は、大原の絵を見るためには、倉敷に通わなければならない。いいものがその場所所鑑賞されるという建前が貫かれるためには、このように地方の美術館に独自の内容が具わらなければならないのである。

このごろ盛んになつていゝる祭も独特の地方行事である。葵祭、祇園祭、高山祭、新しいものでは札幌の雪祭など、これはその土地へ見にゆくほかはない。祇園祭の山鉾が東京の銀座をねり歩くなどということはとても考えられないように、文化行事もその土地でなければという固有の独特のものがあるはずである。日本中の名物が東京駅の売店で買えるといったようなことは、便利ではあつても、なんと味けないことか。さて、標題にかかげたパイロイトは、西ドイツの人口僅か六万程度の小都市である。しかし、この都市では、ワグ

ナーやリストが活躍したなどの故をもつて、毎夏ワグナーの楽劇のみを上演するパイロイト音楽祭がワグナー祝祭劇場で催され、世界中から専門家や愛好者が集まってくる。このほか、国際的な文化行事で、首都以外の地方都市で行われる著名なものとしては、ザルツブルグ(オーストリア)、ミュンヘン(西ドイツ)、ヴェローナ(イタリア)、エディンバラ(イギリス)の音楽祭やバルナ(ブルガリア)のバレエ・コンクールなどがある。

こうした文化行事が世界的規模とまではいわないが、せめて日本の規模において我が国の地方都市において育たないものかと思ふ。私は、これを、標題のごとく「パイロイト方式」と命名したわけである。それはちょうど、高校野球における「甲子園方式」とも対応するものである。

最初に述べたように、地方文化の振興、文化拠点の多極集中化は、文化行政長期計画懇談会のまとめであるが、「パイロイト方式」による文化行事の地方定着もこの報告の具体化であるように思ふ。そして、地方都市における成功が、日本全体における成功として評価されるようになることを期待したいものである。

このように、全国から人を集め得る美術館が地方に設置されるようになり、また、地方における評価が即ち全国的な評価になるということがあつてこそ、本当の意味における先進国型の文化地域計画が完成すると思ふのである。

文化庁月報一〇〇号の歩み

○文化庁月報が創刊されたのは、文化庁創設後、三か月たった昭和四十三年九月十五日である。

「文化庁関係の仕事のあらましをできるだけ多くのかたがたに知っていただき、文化財の保護や芸術文化振興にいつそうの力となっていたらどうか」という趣旨（今日出海初代長官のあいさつ第一号所載）である。

- 第一号は十六頁。目次は次のとおり
▽あいさつ……………今 日出海……………1
▽明治百年記念芸術祭……………2
▽第九期国語審議会審議始まる……………3
▽芸術選奨実施要綱……………3
▽昭和43年青少年芸術劇場……………4
▽宗教学人実務研修会……………5
▽国際文化の交流……………6
▽屋久島天然記念物特別調査……………7
▽史跡日岡古墳壁画模写完成……………7
▽文化財保護審議会開く……………7
▽全国巡回文化財映画会……………8
▽文化財モデル地区だより……………9
▽文化財関係補助金交付……………10
▽文化財愛護全国研究集会……………11
▽ブロック別民俗芸能大会……………11
▽日本伝統工芸展……………12
▽地方巡回美術展……………13
▽国立劇場九月公演……………14
▽文化庁のあらまし……………14

▽文化庁日誌、会議等予告……………16

四十四年正月号（第五号）で今長官は「人は都市の美観をあげつらうが、あの夥しい広告や看板を非難するものがない。小さな店に不釣り合いな看板や折角の絶景に広告の羅列。これを誰も怒るものとなないのに、泰西の美術展ばかりに浮身をやつしてばかりはいられぬ気持である。」「足もとに火がいつている問題に手もつけられず、頭が痛いばかりである。」と書かれた。

月報のスタイルは、大体、このままつづくが、館長、課長等による随想欄が、第二号から、著作権シリーズが第二号からはじまった。

四十七年七月の第四七号は、▽新長官の抱負 安達健二 ▽退任あいさつ 今 日出海 が掲載されている。

今元長官は退任あいさつで「文化というものは、非常に扱いにくいもので、単に事務的手腕で処理していいこうということは無理で、非常に難しい。（美人だけでも性質が悪いというような女性をならすようなもので……）外目には文化なんてちよつといいように聞こえますけれども、いざ「差し」になつてみるとうるさい。」とのちのち庁員によつて引用される名言を吐かれた。

昭和四十八年八月の第六〇号から昭和五十一年三月の第九一号まで、和泉賢二氏のデザインを表紙にした。

第七〇号から「さざなみ」欄が始まり、その後、「しおさい」（海外ニュース関係）「あらかると」などに分化。第八五号は、長官の交替により、安達健二「この七年、文化庁の基礎づくり」安嶋彌「すぐれた文化財は誇りと自信を与えてくれる」を掲載。

昭和五十一年度に入つて、表紙題字をかえ、従来の編集発行文化庁から、編集文化庁発行ぎょうせい、となった。七月七日待望の第三種郵便物の認可を得た。これにより一部の郵便代二九円。年約六百万円の節約となった。

- 発行部数と平均頁数の推移
昭和四三年度 一一〇〇部 一四頁
昭和四四年度 二二〇〇部 一五頁
昭和四五年度 二二〇〇部 一六頁
昭和四六年度 二二〇〇部 一六頁
昭和四七年度 二二〇〇部 一六頁
昭和四八年度 五〇〇〇部 二二頁
昭和四九年度 五二〇〇部 一九頁
昭和五〇年度 五七〇〇部 一八頁
昭和五一年度 六〇〇〇部 二八頁 (予定)

次号予告

- 文化財保護行政の草分け 小川修三
音楽と私 盛田昭夫
味と日本人 深作光貞
大英博物館の姿勢 藤野幸雄
自由時間の増大とその活用 中西尚道

編集後記

○本号で本誌も一〇〇号を迎えた。初代二代の両長官から一〇〇号記念の文章。国際交流基金理事長今日出海初代長官には、お忙しい中を、語っていただいた。○内村直也さんには、文化行政長期懇の会長として一年余り、御苦労をおかけした。氏の御意見、文化懇の中間まとめと併せて読まれるならば、参考となるであろう。

○「私・もの」の菅井汲（すがい・くみ）氏は、パリにおいて活躍している国際的画家。藤田嗣治亡きあとパリ在住の大家日本人画家。たまたま、日本へ帰つておられたのを知り、本間正義国立国際美術館設立準備室長にお願いして原稿を頂戴した。

○古野喜政氏（毎日・大阪社会部）は、サンデー毎日に「ソウル一一二日」を連載したベテラン記者。小高照男・日経水戸支局長と共に本号は、新聞記者の方二人登場と相成った。（大）

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八一二四一(代表)

「文化庁月報」 一月号

(通巻第一〇〇号)

編集 文化庁
昭和52年1月25日印刷・発行

発行所 株式会社ぎょうせい
〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号

本社 〒104東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 〒102東京都新宿区西五軒町52番地

電話(〇三)二六八一二四一(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)
年間購読料 一、八〇〇円